

講演者：

狩野 博幸 氏（同志社大学文化情報学部）

略歴：

1947年、福岡県生まれ。70年、九州大学文学部哲学科美学・美術史専攻卒業。74年、同大学院文学研究科博士課程中退。帝塚山大学助教授、京都国立博物館（美術室長、京都文化資料研究センター長）を経て、現在は同志社大学文化情報学部教授。美術評論家。2000年、京都国立博物館時代に「没後200年伊藤若冲展」を企画し、若冲ブームの火付け役となるなど、若冲研究の第一人者として活躍中。著書に『目をみはる伊藤若冲の「動植綵絵」』『伊藤若冲大全』（ともに小学館）、『異能の画家 伊藤若冲（とんぼの本）』（森村泰昌と共著、新潮社）、『若冲広がり続ける宇宙』（角川書店）などがある。

講演タイトル：

「本近世美術史と京都」

講演概要：

阿部次郎の『徳川時代の芸術と社会』なる戦前の名著が示す如く、いつの頃からか江戸時代という呼称が一般的になったため、「浮世絵は江戸時代の江戸を代表する絵」とか「琳派は江戸時代の京都で発達し、のちに江戸で新たに開花した」などとややこしい説明が必要になってしまった。

従ってここでは近世絵画全般において、京都絵画が果たした重大な役割について話してみたい。奇しくも、本年は「琳派400年」が京都で祝われ、来年は近年つとに評価が高まった若冲なる画家（京都錦小路に生まれた）の生誕300年でもある。

京都の近世の画家たちが切り拓いた世界がどのように魅力的であったかを、改めて確認してみたい。